需要喚起「実証圃場」調査での取り組みのご紹介

平成20年に当社は雪印乳業㈱の100％子会社となりました。100％子会社になった理由のひとつに、「酪農生産現場のさまざまな課題に対し、雪印グループのシナジー効果を発揮することによって、酪農生産への貢献を行ないたい。」などがあります。その想いを形にするべく取り組んでいるのが、需要喚起「実証圃場」調査です。

この取り組みは配合飼料価格の高騰を受け、改めて北海道が持てる力を最大限発揮するためには、自給飼料の良質化に取り組むことが重要であるとの認識に基づいています。しかしながら、その具体的手法について『どのように進めて行けば良いのか』と、とまどっている酪農家さんが多いのではないかと思います。

自給飼料の良質化にはさまざまな手法があり、地域にあった取り組みを雪印グループとして提案し、地域の酪農家の皆様の所得向上に寄与することを目的として進めております。

平成20年春から、取り組みは進められており、昨年度の成果の概要については酪総研ホームページでもご紹介させていただいております。是非一度ごらんになることをお勧めします。

平成21年度は、取り組みを行なっている圃場は10箇所であり、その取り組みの概要は下記のようになっております。

① イタリアンライグラスを活用して、増え続けるリードキャナリーグラスを防除できないか。
② ペレニアルライグラスを追播して、放牧地の草量及び採食量を上げられないか。
③ 限界地帯におけるアルファルファの安定栽培を実現し、乳量を増やせないか。
④ 簡易更新で草地の植生改善を行い、草地更新のコストを下げられないか。
⑤ デントコーンを収穫した後に、ライ麦を作付けして、２年３作で自給飼料の増産につなげられないか。
⑥ 集団でのデントコーン作付けにより、コントラクター、細断式ベーラーを用いたラッピングサイレージ化により、生産コストを下げられないか

などのさまざまな取り組みを進めております。

今回はその中で、⑤番のライ麦の作付けによる２年３作についてご紹介します。

デントコーンの後作にライ麦の作付けにより、収量アップへの挑戦

この取り組みは冬期間越冬させ翌年初夏に収穫するライ麦を、デントコーン作付け後に栽培し、ライ麦収穫後にデントコーンを栽培、同じ畑で２年３作を実現し、自給飼料の増産につなげる作付体系と言えます。（清里町にて実施）

大まかな栽培方法（作付体系）は下記の通りです。

① デントコーン収穫作業終了後、デスクもしくはプラウ耕かけ
（デントコーンの切り株が残らないように注意）

小麦ドリル使用時の播種前の状況

② 施肥は窒素成分量２kg／10a程度
（過剰な施肥は硝酸態窒素のもと、牛の嗜好性を考慮した施肥が重要）
③ 播種時期は９月下旬までに終えるのが望ましい。
（ライ麦の越冬を考慮して。作業スケジュールを考慮してデントコーンの登熟の早い品種の作付けも検討。
④ 堆肥施用は隔年で。
（２年３作を複数年続けると、堆肥を散布するスケジュールが組めません。やはり畑に有機物を還元していくことが重要ですので、２年３作を行なった畑は堆肥の還元をお勧めします）

⑤　播種量は８kg／10a（小麦用ドリル使用時）
　　ブロキャス使用時は10kg／10a。
⑥　播種後の鎮圧は出芽揃いを良好にし、収穫時の土壌混入を軽減できる。

ブロキャス使用時の発芽の状況

約１週間でこんなに伸びます

⑦　雪腐れ防除は必要に応じてトップジンM利用（実証圃場では使用していない）
⑧　早春のムギ踏みは有効（収穫時の土壌混入防止）
⑨　雪解け後のライ麦の生育は著しく、出穂後の栄養低下も早く、収穫時期を逃さぬよう注意。

⑩　おおむねの収穫時期は５月中旬～下旬頃。

春の伸張は思いのほか早く、収穫時期を逃さぬよう注意が必要です。

ライ麦の収穫風景　2009. 6．4 清里町

本年のライ麦の収量は約2.5t／10a

ライ麦の収穫後はデントコーンの播種。

取り組みの一部をご紹介させていただきましたが、新たな技術を現場から生み出すことが出来ればとの思いで取り組んでおります。

この10月から、雪印メグミルクグループの一員となりました。新会社は酪農生産への貢献にきっちり向き合っていく方針が示されており、当社の果たすべき役割は大きいと自負しております。
今後とも地域の粗飼料基盤の確立に雪印メグミルクグループをご活用頂きますようお願い申し上げます。

（販売企画課　課長　浅沼）